

2020年11月8日 佐土原教会礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書13章18～30節
説教題：イエスの左側の席

カナダのメノナイトの聖書学校で英語を勉強していた頃の話です。プログラムの中には、「ヨハネ福音書」をザーッと読んで行くという授業もありました。13章を勉強していた時、先生も疲れていたのでしょう、「自由にディスカッションしなさい」ということで、皆が思い思いに好きなことを言い出しました。1人のクリスチャンの青年がこう言いました。「僕はユダがかわいそうだと思う。全てが神様の御手の中にあるのなら、ユダは、イエス様を裏切る役割を与えられて、それを演じたのではないか。彼は損な役回りを受け持たされてかわいそうだ」。私は、普段は何も言えずにボーッとしていたのですが、聖書のことなので、黙ってもいられず、「彼にはイエス様を裏切らない自由があったはずだ。だけど、彼は自分で裏切ることを選んだのだ」、そのようなことを言いました。しかし彼は「僕は納得出来ない、ユダが可哀そうだ」と言い続けていました。今朝の箇所を読んで、その時のことを思い出しました。

なぜユダはイエス様を裏切ったのか、聖書に書いていない以上、詳しいことは分かりませんが、信仰を捨てて行く彼の姿は、反面教師として、信仰をしっかりと保って、育てて行くためのポイントのようなものを教えてくれます。2つのことを申し上げます。

1：どんな時も神を信頼すること

ユダはこの時、既に祭司長のところに行き、銀貨30枚をもらって、大きな騒ぎにならないようにイエスを捕まえられるチャンスが来たら知らせる、という話をつけていたようです。しかし彼も、イエス様に、12弟子の1人として選ばれた人です。そして、仕事も何もかも置いて、イエス様に着き従って来た人です。また、会計を任されていたようですから、皆からも信頼され、良い働きをして来た人だと思えるのです。なぜ、その彼が、イエス様を売り渡して行くのでしょうか。

1つの推測があります。イエス様の進む方向とユダの願いとが違って、ユダはイエス様に失望して反発したのではないか、という推測です。当時、ユダヤ人は、神からの救い主が現れて、ローマを追い出して、ユダヤの栄光を取り戻してくれることを願っていました。ユダも、その夢をイエス様に託したのかも知れません。そうであれば、イエス様が奇跡を為さった時、彼は喜んだと思います。「この人ならやってくれる」。ところが、彼が徐々に分かって来たのは、イエス様にはローマと戦う等という意図はない、ということでした。だからユダは、強硬手段に訴えて、どうしてもイエス様が力に、武力(奇跡的な、天的な武力)に、訴えなければならないような状況を造り出そうとしたのかも知れません。あくまでも推測ですが、いずれにしても、彼の中に、イエス様に対する苛立ち、失望、反発があり、そこにサタンが働いたのではないのでしょうか。

何を教えられるのでしょうか。私は「難しい時こそ、神を信頼しなければならない」ということを教えられます。伝道生涯におけるイエス様の姿に、教えに、行為に、納得出来なかったのは、ユダだけではなかったと思います。他の弟子達も、どこかにそのようなものを持っていた

のではないのでしょうか。しかし、他の弟子達が、なぜユダのようにならなかったのか。それは、彼らには「分からないことがあってもイエス様を信頼する、イエス様に委ねる」、そういう思いが、少なくとも途中まではあったからだと思うのです。例えばペテロは「ご一緒なら、牢であろうと、死であろうと、覚悟は出来ております」と言いました。イエス様に委ねようとしたのです。しかしユダは「自分の願いとは違う」と反発したのです。

「サタンが彼(ユダ)に入った」(27)という言葉を読む時、私は、使徒パウロのことを思い出します。パウロは何らかの持病—(激しい痛みの伴う病気であったと思われませんが)—を持ちながら伝道しました。彼は「これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました」(2 コリント 12:8)と言っています。「3度願った」というのは、「繰り返し、長い期間、祈った」ということです。彼は「サタンの使いだ」と言いました。それほど辛かった、それほど彼の信仰を揺さぶったのでしょう。「こんな病気を抱えていては働きは出来ない。なぜ神様はこの病気を取り去って下さらないのか。神様は本当に最善を為さるのか」、それは厳しい信仰の戦いだったと思います。しかし、主は彼に言われたのです。「わたしの恵みは、あなたに十分である…わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」(2 コリント 12:9)。「弱いところが取り去られることはない、しかし、その弱さを神の恵みが担っていく」ということでした。そして確かに彼は、良さを抱えたまま働きを続けていたのです。彼は言いました。「私は…大いに喜んで私の弱さを誇りましょう」(2 コリント 12:9)。彼の願いの通りにはなりませんでしたが。しかし、彼は神のやり方に信頼し、委ねたのです。そして神の恵みに支えられながら、素晴らしい働きを続けたのです。

ユダにも分からないことがあった。しかし彼は、イエス様に委ねること、神が最善を為して下さることを信頼しなかったのです。その結果、彼は、最後には絶望に至ってしまうのです。私達の日々の生活にも「なぜ私にこんなことが起こるのか」、あるいは「結局、神様は何もしないのだ」というような思いに襲われる時もあるかも知れません。しかし、実はその時が、私達の信仰にとって大切な時なのです。詩篇の詩人は言いました。「民よ。どんなときにも、神に信頼せよ」(詩篇 62:8)。

アメリカの同時多発テロの時、ピッツバーグに墜落した旅客機は、国会議事堂に突っ込む予定だったけれど、4人の乗客が阻止して、結果として地上に死者を出さずに済んだのです。4人の内の1人がリサ・ビーマーという人の御主人でした。夫は亡くなりました。幸せの絶頂から地獄に突き落とされる感じだったそうです。「なぜこんなことが」、泣きながら神に問うたのです。長い信仰の闘いがありました。でも彼女は立ち上がりました。「私は、なぜ、と問わないことにしました。そうではなく、私は子供達のために前進することが必要です…私は神を信じる道を選びました。なぜか。その理由を知りたいとは思いません。でも私はその道を日々選び取ります」。そうやって失意の中にいる人々を励まして回ったのです。それで彼女自身も生きたのです。

難しい時、困難な時こそ、神への信頼の道を選ぶか、不信の道を選ぶか、それが問われるのではないのでしょうか。神に信頼する方を選び取ることで、それが、私達の信仰を保たせ、育て、やがて祝福に導く道なのです。

2：神の前に遜り、主を見上げる

ユダの裏切りを知っておられたイエス様は、ユダが自ら悔い改めることが出来るように、繰り返しユダの心に訴えかけられます。「洗足」もそうです。ユダは自分の足を洗われるイエス様を見て、良心の痛みを感じなかったのでしょうか。18節でも「詩篇」を引用してユダに訴えておられます。名前を言われません。「今、心を変えれば、まだ間にあうのだ」という訴えです。そして「最後の晩餐」ですが、レオナルド・ダ・ビンチの絵とは違い、人々は左肘で体を支えて横になり、テーブルを囲み、右手を使って食事をしました。21節でイエスが「あなた方の一人がわたしを裏切ろうとしている」と言われた時、ペテロはイエス様の右にいた弟子(ヨハネ)に「だれのことを言っておられるか聞くように合図を」します。ヨハネはイエス様の右に居て、胸元に頭があるような状態でしたから小声で話をする事が出来ました。イエス様も小声で「パン切れを浸して与える者です」(26)と言われたのでしょう。小声なので他の弟子達には分からなかったようです。イエス様はパン切れをユダに与えられます。この体勢でイエス様がパン切れを与えることが出来るのは、イエス様の両側にいた人物です。右側がヨハネなら、ユダは左側にいたこととなります。当時、主人の左隣の席というのは、主人にとって最も大切な人に座ってもらう席でした。イエス様は、その大切な場所にユダを招かれたのです。そのようにイエス様は、ユダが自らの思いでイエス様に立ち帰ることが出来るように訴えかけをなされたのです。しかしユダは、もう応えることが出来ない。パン切れを渡されるのは、イエス様のぎりぎりの招きでした。しかし彼はそれを逆手にとって、最後の決心をしてそこを立ち去るのです。闇に消えるのです。

何を教えられるのでしょうか。私は、神様の忍耐を尽くした悔い改めへの招きを思います。ユダは、際立った悪者ではなかったと思います。29節を見ると、弟子達は、ユダがイエス様に頼まれた愛の奉仕をしに行くのだと思ったくらいです。真面目にイエス様に従っていたのだと思います。しかし、申し上げたように、イエス様が自分の思い通りにしてくれないことに反発して、サタンに導かれたのです。佐藤彰先生の本にこんな文章があります。「クリスチャンは、苦しくなるとなぜか…神を疑ったり、神から離れたりするようです」。ということは、誰もユダのようになる可能性がないとは言えないのではないのでしょうか。だからこそ私達は、信仰をしっかり保つために気を配らなければならないと思うのです。

どうすれば良いのでしょうか。ここで、神はどのようにしてユダが裏切らないようにされなかったのか、という疑問があります。それは、イエス様が最後の最後までユダを愛し、ユダの自由を尊重されたからです。自由を尊重しながら、しかしご自分の許にその魂が帰って来るように呼びかけられたのです。私は、私達にとって大切なのは、その呼びかけに答えることだと思うのです。同じようにイエス様を裏切ったペテロは、どん底から立ち上がり、やがて指導者になって行くのです。ペテロとユダの違い、ペテロは主の赦しを信じ、悔い改めて、再び主を見上げたのです。先日「第二歴代誌」を読んでいて、1つの文章が迫って来ました。「彼らがへりくだったので、わたしは彼らを滅ぼさない。間もなく彼らに救いを与えよう」(2歴代12:7)。さんざん不信仰な行いをした王様、民が、遜り、悔い改めて、もう一度主を求めた時、主はそのことを喜び、大きく取り上げ、答えて下さったのです。この不信の民も、神様に対する反発のような

ものがあつたのだと思うのです。でも、そこに祝福はないのです。(1 番目とある意味、重なりますが)神の前に遜って神を見上げるところに祝福はあるのです。心を低くして主を見上げることです。更に言えば祈りです。「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」、この祈りが私達を守って行くと思います。

「アメージング・グレース/驚くばかりの」という讃美歌を作ったジョン・ニュートンは奴隷船の船長でした。酷いこともしました。彼のお母さんは彼のために熱心に祈りました。でも、彼は思っていました。「神がいたとしても、俺のような奴は受け入れてもらえないはずがない」。でも、ある日、彼は嵐に遭い、死ぬかも知れないと思った時、祈ったのです。「神様、助けて下さい」。その時、彼は神の声を聞くのです。「あなたを愛している。あなたを助ける」。彼はびっくりしました。「俺のような者を愛しておられるのですか。神様の愛ってそんなに大きいのですが」。彼は、神の招きに答えて神に帰りました。神と共に生きました。そして亡くなる時、こう言いました。「私は、2 つのことだけは覚えている。1 つは私がとんでもない罪人であったこと。もう1 つは、キリストはとんでもない救い主であったということだ」。

私達も信仰が揺れます。神に反発すること、眩くこともあるでしょう。神から心が離れることもあるかも知れない。でも、そこに祝福はない。私達の信じる神は、私達の思いを越えて憐れみ深い神です。何度でも、私達の不信を赦し、受け入れて下さいます。この神に立ち帰り、神と共に生きること、そこに祝福はあるのです。